

大好きな負け論メンバーへ

第 11 期 蓮岡 聡美

卒業エッセイを執筆する前に、目をつむってこの 2 年間を振り返る。何について書こうか、なんて思いを馳せてみる。結局、思い至ったテーマは、標題のとおりである（住田、負け論と書いてごめんね 笑）。

さて、他学部生である著者が、商学部一のエグゼミといわれる小野ゼミの門戸をたたいた理由は、端的に言えば、残りの学生生活を文字通り「エグリ」たかったからである。そんな理由でエグゼミに入会し、奇しくも論文代表なんて役職に就いた。当初、論文代表という役職に不安で仕方がなかったが、「さとみんを他の人に任せられない」（土屋, 2013）という言葉に端を発し、負け論には 5 人のメンバーが揃った。エグりがりがり論代になったものだから、夏休みは、毎日グル学に集まった。集まりすぎて文句もあつただろうし、楽しいことばかりではなかったけれども、この 5 人だからエグることに意味があったのだと思う。お酒を飲んだ日も飲まなかった日も、何かにつけては、土屋家に泊まっては、朝はグル学に舞い戻る生活だった。これぞ、著者の思い描いていた小野ゼミライフであった。

「クソども」と呼ばれたり、「最初は 1 番進んでいたのに…」なんて揶揄されたり、兎角馬鹿にされがちな負け論メンバーであったが、論代である著者の負け論メンバーに対する見解は、「最高のメンバー」の一語に尽きる。だから、誰かが何か言おうものなら、「黙れ、カス」といってやりたい。

この 2 年間、負け論メンバーと過ごした時間が、大きすぎて楽しすぎて、来年からみんながいないことを思うと、正直悲しい。先日、個人で出していた論文の締め切りに追われていたのだが、いよいよまずい、となった時、助けてくれたのは負け論メンバーだった。もちろん、みんな卒論が進んでいるわけではないけれども、進んでないからこそ辛さをわかってくれたわけで、放っては置けないと、窮地に立たされた著者を支えてくれた。真冬の深夜、寒空の下、恵比寿で一緒に徹夜をしてくれる仲間なんてそういない。

小野ゼミに入会して、多くの時間や単位を失ったけれども、それと引き替えに、かけがえのないものを得た。ゼミを卒業してからも連絡をくれる 10 期の先輩や、毎週カレーを奢ってくれる 9 期のやまぐーも、小野ゼミに入って知り合えた大切な人たちだ。そして、なにより一番、11 期負け論メンバーに出会えたことが、何よりも宝物だ。小野ゼミに入る前の私は、なんでもない毎日が、こんなにもかけがえのない時間になるとは思ってもみなかった。そう思わせてくれたのは、紛れもなく負け論メンバーだ。

著者は、大学院に進学する。卒業エッセイを書いているけれども、実際に小野ゼミを卒業するまでは、6 年もの時間がある。だから、あと 6 年は、みんながいつでも集まれる場所を、帰って来られる場所を、三田に用意しておく。みんながもし何か悩んだ時や、ボーナスをもらった時は、いつでも三田に戻ってきてほしい。そして、その時には、著者の成長した姿をみんなに見せると、ここに誓おう。